

学友会東京支部だより

南高

発行 和歌山県立南部高等学校
学友会東京支部
所在 〒363-0022
埼玉県桶川市若宮1丁目
8番地 12-204

第5回南高学友会東京支部総会開催



平成23年11月19日、第5回南高学友会東京支部総会は、品川プリンスのメインタワーに於いて開催されました。出席者は総勢52名。母校と大阪支部からは、緒方政仁校長・森下信夫事務局長のお二人がご参加くださいました。

総会は、議題の審議に先立って、故人となられた会員の方々に対して黙祷を捧げた後、柳本茂樹顧問の司会、寺西支部長の議事進行で始まりました。

議題審議は第4期の活動報告以下、順次に審議され、いずれも原案通り承認されました。(審議承認事項は3ページに掲載)

第2部の懇親会は、森下さんによるユーモアのある乾杯の音頭でスタートしました。今回の宴席は着席スタイルとしたので、和・洋・中の卓盛り料理が各個人の席に運ばれて、ゆったりと落ち着いた雰囲気での懇談の様子が見られました。

食事・歓談の間には、三本久美子さんのソプラノ独唱(ピアノ伴奏 池田素子さん)・岡村茂子さんのピアノ演奏など素晴らしい音楽を楽しみました。続いて緒方校長先生には、ご挨拶と、映像を通しての現母校の姿を説明して頂きました。当然のことながら、私たちが学んだ頃の木造校舎は立派な鉄筋造りに変身していて、改めて歳月の流れを感じました。

その後、会場は歌自慢によるカラオケや稲井清子さんの隠し芸「南京玉すだれ」、例年好評のビンゴゲームで大盛り上がりでした。終盤での合唱「♪上を向いて歩こう」(指揮 宮本昌子さん・ピアノ伴奏 岩田真澄さん)は、被災地の方々への思いを込めて歌いました。最後は懐かしい校歌を、高らかに、誇らしく斉唱し、無事閉会となりました。

「ふる里」を同じくする者同士がここ東京で一堂に会し、和やかに歓談したり日頃胸の内にたまった思いを吐き出してスッキリしたりする、そうした「場」を提供することも学友会の存在意義であり、使命だと実感させられた一日でした。

(事務局 記)



東京支部の皆様には、平素から支部運営に多大なご支援を賜り厚く御礼申し上げます。昨年は、3月に東日本大震災が、9月には紀伊半島に洪水被害がありました。犠牲になられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。

さて、昨秋の第5回支部総会の役員改選で引続き支部長を仰せつかりました。新スタッフ一同、一致協力し、明るく元気な支部づくりに努力を重ねてまいります。

例年、支部では会員同士の旧交を温め親睦を深める機会の一つとして、春・秋のウォーキングを各地区で実施しておりますが、昨年は残念ながらいつまでも続く余震や交通状況から止むを得ず中止いたしました。今年は是非とも実施したいと思っております。

この催しは参加こそ十数名ですが、参加者からは毎回好評を頂いております。久しぶりの同級生や知人とで、近況やふるりの思い出を楽しく語り合う一日を過ごし、一層の親睦を深める機会になっているものと思われます。なかでも、女性にとっては日頃のストレス解消に一役かっているのかも知れません。むしろ、そうした機会として積極的にご活用頂ければと願うところです。未だ参加されていない方々も、どうか一度はご体験くださいますようお願いいたします。

この度の災害では、家族や仲間、それに地域社会との繋がりが如何に大切かということを改めて知らされました。昨年末の日本漢字検定協会が選んだ漢字は「絆」でしたが、このような時なればこそ、私達はこれからも懐かしいふるりに思いを寄せつつ、同郷人同士としての「絆」を再確認し、より深く親睦を図ることが出来るような支部づくりを目指してゆきたいと思ひます。今後とも宜しくご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



第5回 南高学友会東京支部総会に参加して

南部高等学校長 緒方 政仁

11月19日(土)品川プリンスホテルにて、第5回南部高等学校学友会東京支部総会が開催され、参加させて頂きました。当初、知らない方々ばかりなので、話し下手な私にとってどうなることかと心配しておりましたが、気さくな方々ばかりで、色々なことについて歓談することが出来、大変ありがたかったです。また、知らない方々ばかりと思っておりましたが、南部高校の創立百周年記念の時にお世話になった方々や、実家のご近所で、面識はなかったものの身近に感じられる方々が多くおられ、話が弾みました。私が教師になり立ての頃、南部高校で講師をされており、同僚として一緒に勤めたことのある三本(旧姓 関)陽子先生が会計監事として学友会の役員をされ、当日は司会もされており、懐かしく、しかも東京でも頑張っておられる様子で大変うれしく思いました。

総会の開催中、色々な方と話をしている中で、どの方からも母校を思う気持ちがひしひしと伝わり、東京という和歌山から遠く離れた地でも、たくさんの方々が南部高校のことを心配され、応援されていることを再認識させて頂きました。学校を預かる者の一人として責任を強く感じ、背中を力強く押されたという南部高校発展のために頑張らなくてはというエネルギーを大変多くもらったような気がしました。

南部高校学友会東京支部総会にお招きいただき本当にありがとうございました。

支部長の寺西寛志様や事務局長の齋藤文子様をはじめとする役員の方々には、色々とお世話をかけると思いますが、どうかよろしく願い申し上げます。また、今後の東京支部の益々のご発展をお祈りいたします。



※季節により献立の内容が若干変更になる場合がございます

同窓会宿泊プラン

期間：土・休前日・シーズン期を除く通年

全コース1泊2食付(税・サ込) 記念写真代込み

■思い出コース 10,600円 ■華やきコース 11,600円 ■悠々コース 13,600円

★プラン特典

①幹事代行サービス ②カラオケサービス ③記念写真撮影
*代行案内状作成・発送(一件につき代金別途150円)

和歌山県 紀伊半島 和歌山県 和歌山県 和歌山県
和歌山県 和歌山県 和歌山県 和歌山県 和歌山県

TEL.0739-72-3939

FAX.0739-72-5616

http://www.kishuji-minabe.jp/



露天風呂
オープンしました!

審議承認事項

1. 会則変更の件

第5条4の事務局担当のうち庶務2名を3名に、会計1名を2名にし、合計6名に変更する。

第5章 会計(会計年度)

第20条 「当支部の会計年度は、毎年10月1日から始まり翌年9月末日に終わる」を
「当支部の会計年度は、毎年4月1日から始まり翌年3月末日に終わる」に変更する。

<付則への記入>

上記規約の変更を以下のように付則に記入する

第27条 本規約は、平成23年11月19日改定実施する。

2. 第4期(平成21年10月～23年9月)決算報告書

(単位 円)

* 前期繰越金に当期分賛助会費 120,000円(60名)を含む

収入の部		支出の部	
前期繰越金	334,705	総会懇親会費	452,993
当期賛助会費	318,000	役員会議費	87,104
賛助会費預り分	20,000	広報会議費	13,820
総会懇親会費	301,000	会報発行費	165,222
ご祝儀・寄付他	126,000	事務用品費	38,184
広告掲載料受入	50,000	通信費	92,600
本部支援金	30,000	慶弔見舞金	20,000
受取利息	43	雑費	68,262
雑収入	2,804	次期繰越金	244,367
合 計	1,182,552		1,182,552

* 第4期賛助会員数：219名(21年度 113名、22年度 106名)

3. 第5期(平成23年10月～25年3月)予算書

収入の部		支出の部	
前期繰越金	244,367	総会懇親会費	500,000
当期賛助会費	400,000	役員会議費	90,000
賛助会費預り分		広報会議費	50,000
総会懇親会費	360,000	会報発行費	80,000
ご祝儀・寄付他		事務用品費	50,000
広告掲載料受入	30,000	通信費	80,000
本部支援金	30,000	慶弔見舞金	20,000
受取利息		雑費	60,000
雑収入		次期繰越金	134,367
合 計	1,064,367		1,064,367

第5回総会の役員改選で、山本日出夫さん(副支部長)・藤川安夫さん(会計監事)が
退任されました。長い間、支部役員としてご尽力を頂きありがとうございました。



第五期 新役員紹介

支部長	寺西 寛志	昭三三年卒
副支部長	前田 至美	昭二九年卒
顧問	柳本 茂樹	昭二八年卒
顧問	木村 允彦	昭三八年卒
顧問	石田 明子	昭三一年卒
顧問	木村 允彦	昭三八年卒
顧問	林 好通	昭二八年卒
顧問	林 忠雄	昭二八年卒
顧問	浜口 忠央	昭二八年卒
事務局長	齋藤 文子	昭四十年卒
庶務	稲井 清子	昭二八年卒
同(新)	灘井 新一	昭四二年卒
同(新)	山崎 春樹	昭四二年卒
同(新)	岩本 喜直	昭三四年卒
同(新)	宮下 典子	昭三八年卒
幹事	宮本 双葉	昭三十年卒
同	小西 早苗	昭三四年卒
同	岩本 佳子	昭三六年卒
同	岩本 佳子	昭三六年卒
会計監事	三本 陽子	昭四五年卒
同	堅田 仁	平二二年卒

よろしくお願
いたします





「ふるさと南部便り」

昭和 45 年卒 小谷 眞千子 (みなべ町 在住)

新聞などで「南部」という活字に触れたとき「みなべ」、またはテレビなどで「みなべ」という音声を耳にしたとき「南部」とすぐに思考回路が繋がる人が一体日本中に何人いるのだろうか。南部に生まれ南部で育ったものなら、何の違和感もなく故郷みなべを思い出すのだろうか。

7 年前南部町と南部川村が町村合併するときに住民にアンケートをとったが、漢字の南部がいいという声は年配の人に多くあった。町名はひらがなの「みなべ」になったが、町内の小・中学校・銀行の支店名・駅名、そして南部高校ももちろん漢字のままである。

私は南部町で生まれ、南部小学校、中学校、そして南部高校と、なんの選択肢もなく南部高校に進学したと思う。ちなみに現在の南部中学校の卒業生の進路で地元の南部高校への進学率は 50% にも満たない。学区制の廃止で田辺、日高、神島（田辺商業）と普通科だけでも通学できる高校が南高以外にできたからかもしれない。逆に電車で南高に通ってくる生徒も多く、朝の通学時間帯になると、駅はにわかに賑やかになって、校門まで生徒たちの列が続く。

数年前から母校南部高校の学校評議委員をやっている関係で一年に一度、高校を訪問させていただく。農業科は生産技術科、家政科は服飾デザイン科と名前を変えていて、生産技術科や園芸科には女生徒の顔も見える。今年も東京ドームで開催されている「ふるさと祭り東京 2012」に女生徒が参加し南高ブランドの梅ジャムやクッキーなどを販売したという。生徒数は私が高校生だったときの約半分。

さて私が入学した昭和 42 年の頃は、体育教官室に続いて木造の教室があって、私は C 組で担任は数学の関先生。ちなみに B 組は三宅先生、D 組は原田先生と若い独身の先生だったのが羨ましかった。それでも、一応進学クラスの C・D 組は数学英語は英数教室に行くものと教室に残るものとにわかれていて、英数教室での授業の入れ替わりの休み時間に上級生に声をかけられたり、英語の授業で校庭に出て先生のギターで「ドナドナドナ・・・」と英語の歌詞で歌ったり、(今思えば独りよがりな「これが青春」)、選択芸術の音楽で真島先生が毎回かけてくれた「アイネクライネ ナハトムジーク」、ほとんど退屈で居眠り状態の中で聞いたこの曲も今となっては懐かしい。苦手な体育では南高体操なるものを入学早々覚えさせられ、テストまであった。古典の榎野先生は声が素敵だったなあなんて。英数教室から脱走して授業放棄したことなど、あまり熱心に勉強した思い出はないが、四十年以上も前のことが次々に浮かんでくる。

二年ほど前、東京支部の会に南部から出席していた後援会長の原田先生から私の携帯に電話がかかり、懐かしい同級生の三本さんやら、兄の同級生らしき方やら、どここのだれだれさん？とか何人かと次々に電話を代わり話したことがあった。私の叔父（浜口）から東京支部のことは聞いていたが、年代を超えて南高卒業生の集まりで会場の熱気が伝わってきた。

昨年の台風 12 号では、かつて経験したことのない大雨の被害をうけ、みなべを離れている友人や知人から多くのお見舞いの電話をいただいた。娘が東京に嫁ぎ生活しているが、娘の友人からも「みなべのお母さん大丈夫？」と心配していただいたという。(青梅の季節にはいつも南高梅をたくさんおすそ分けしているせいかもしれないが・・・)

今年の寒さは厳しく、それでもふるさとみなべでは梅の花がちらほら咲き始めました。東京支部の皆さんのご健康とご活躍をふるさと南部よりお祈りいたしております。

定年がカウントダウンという友に 梅一輪の写メール送る

ま子



「故郷にて」

昭和 38 年卒 木村 允彦 (埼玉県桶川市 在住)

一昨年 (2010 年) から昨年にかけて高齢の母の支援のため故郷田辺に帰ること 327 日。帰省の車中の出来事や、和歌山で見たこと感じたことを日記風に・・・。

2010 年 3 月 3 日 (木)

天気良し。冷たい風が吹く中、周参見町の「エビとカニの水族館」に出掛ける。江住駅で下車。42 号線を周参見に向かう。少し行ったら海辺の道に下り、海岸線に沿って歩く、空は晴れ、紺碧の太平洋、岩に碎ける波しぶ



[トラフカップパ]

き、磯の匂い、潮風心地良し！

江須崎というロケーションの良い場所にこぢんまりとしたその水族館はあった。ここは普通的水族館では主役ではないエビとカニだけを集めた珍しい水族館。世界一重いジャイアントタスマニアンクラブ、世界一脚が長いタカハシガニが狭い水槽から窮屈そうにこちらを見ていた。ユニークな顔と動きがユーモラスなカニ、トラフカッパ。美味しそうな名前だが猛毒を持つスベスベマンジュウガニ。その他、気に入ったところではセミエビ・フトエビシャコ・ツノガニ・ユウモンガニが面白かった。館を出て枯木灘の風に吹かれ海を眺める。沖に行く大型船。崖の木々がせわしく葉音をたてる中をもときた道を駅に向かう。

(田辺市はこの水族館を扇ヶ浜に誘致を計画しているが台風12号の災害復旧を優先しているため、財政的に厳しく、早期に誘致できない状況を明らかにした。2012年2月7日(火)紀伊民報)

2010年10月28日(水)

高速バスを降り、和歌山で田辺行き各停の4人掛けの椅子に腰をおろす。高校生にしては背も低く幼顔の少年が、座ってもええですか…？と遠慮気味に聞いてきたのでどうぞという。彼に何処の学校に行くん？と、聞いたら日高中学に行くという。住いは岩出町で中高一貫教育の日高中学に2時間掛けて通学しているとのこと。向陽中学や桐蔭中学が近くってええのではといったらレベルが高くて行けないという。智弁は…？と聞いたらメチャレベルが高いという。質問攻めの小うるさいオイヤンと話し終った後、彼はウトウトし始め、御坊までぐっすり！駅に着いても起きないので御坊だよと肩を軽く叩く、眠そうな目をこすりながら少年は席を立つ、和歌山の受験戦争を垣間見た朝。

(学区制がなくなったので県内の公立高校には何処にでも行けるようになった。)

2011年8月5日(金)

以前から見たい見たいと思っていたベトナム水上人形劇が田辺市役所主催で、新庄総合公園野外音楽堂で催されるというので出掛ける。この劇はベトナムの自然・農耕生活を基に創られ、豊作を祈って農民の娯楽として790年の歴史を持っている。日本の人形を使った劇と比べると彩色・形・動きが異なっていて、何よりも違うのがステージが「水上」であること。激しい動きとコミカルな演技で人形達は水の上で舞う。ステージの奥のスタレに隠れた人形使いは竹や木のサオを用いて操る。サオに取り付けられた人形達は回転軸とカジで、右に左に、空中に、水中にと、激しく舞う。水しぶきが飛び交い迫力満点！それに妙に色っぽいのも良かった。ベトナム語がわからなくても伝統音楽と語りが私を充分楽しませてくれた。ベトナムの地域にはいろんな水上人形劇があるという。本場に行ってみたくなった1日だった。



お奨め番組のご紹介

和歌山のニュースを知るにはNHK和歌山支局が平日18時10分から18時59分まで放送の「あすのWA！」がええよ！

台風12号が紀伊半島を襲った当時、関東地方でもメディアは大きく取り上げていたが、月日の経過で放送されることもなく被災地は忘れられた。帰省してこの番組を見てあまりの被害の大きさに目を見張る。ズタズタに寸断された道路・大きな石がゴロゴロ転がっている河川・山崩れ・土砂ダム・那智川橋梁の崩落・土砂で押し潰され亡くなられた方の家屋・泥だらけの町並み・本宮大社の土砂流入・なぎ倒された木々・梅やミカン畑の崩れ・日高川町の鮎、アマゴ種苗センターの水没被害等々、被害地の現状・復旧・復興の様子が地元局ではないと捉えることのできないきめ細かい視点が良く、いろいろと考えさせられた。

2012年1月16日(月)放送

台風12号の被害を受けた那智勝浦町。流され水に浸かり泥をかぶった卒業アルバムや写真、野球道具等をボランティアの方が一つ一つ丁寧に洗い、剥がして乾かし、市野々小学校で展示。45枚の写真やハーモニカ等6点が持ち主に戻った話。もう一つの話は大島(串本町)が今イノシシ被害で悩まされているという。元々この島にはイノシシはいなかったが橋ができたことで渡ってきたのではないかと、または流れついて繁殖したのではないかと考えられている。京都大学大島実験所の梅本信也先生が大島のいたるところに自生しているアオノクスランやソテツや炭の消臭効果を利用して、身近にある自然素材の力でイノシシを近づかせない研究をしている。これ等が有効利用できれば低予算で済むので効果が期待される。

2012年1月30日(月)放送

日高川町の鮎、アマゴ種苗センターが5ヶ月ぶりに復旧。現在は通常の1/4で140万匹が養殖されたという明るいニュースが流れていた。元の状態に早く戻れることを祈ってやみません。



帰省されたら「あすのWA！」見てね！

おたよりコーナ

「父・青木 亮」

昭和 40 年卒

青木 務（京都市左京区 在住）

我が父、青木亮は昨年（2019年）の2月に永眠しました。亡くなる日の朝、姉に「俺も本日がデッドクロスで最後だ」といったそうだ。すなわち、体温が上がり、脈拍が下がり、上昇曲線と下降曲線がクロスして両者の値が同じになったとき、命が尽きるということで、学生時代に医学部の友達に聞いたとのこと。仕事の関係上、母の最後に立ち会うことはできなかったが、父は最後まで手を握り、看取ることができた。



子どもの頃から体が弱く、大学は8年もかかって卒業。今でいう不登校児。授業のため北海道の下宿に帰る直前になると、いつも熱を出して京都の実家で寝ていたとのこと。りんごの研究所に就職が決まっていたが、戦争の影響でその研究所の設置が延期。8人兄弟の長男だった故、はやく就職しろとの祖父の命により、台湾の専売公社の課長として赴任。しばらくして体を壊し、京都でぶらぶらしているとき、大学の先輩から「気候がいいから静養に来ないか」と誘われ、「遊んでいるのなら手伝え」ということで、南部高校の前身である紀南農業学校に勤めたのが、南部との出会いである。それ以後、生物（後で聞いたら、地学や英語も教えていたらしい。びっくり）の教師として、定年まで、どこの学校に転勤することもなく、ひたすら南部高校での勤務であった。

定年後は、京都で生活することになるが、よく寝込んでおり、母が「父さん、もうダメかもしれないから覚悟しておいた方がいいよ」と何度か聞かされたものである。ただ、写真（82歳の父と私）に写っているように、80歳を越えてからは元気で、結局は、97歳までほとんど寝込むことがなかった。私は最初、京都で勤務していたが、仕事の関係上、35歳からは神戸に住んでおり、両親には「63歳の定年になったら帰ってくるから」といていた。しかし、元気な父を見て、「100歳までは頑張る。しばらく神戸で働くから」といい、父もそれを了承していた。しかし、1月に母の三回忌の法事を済ませ、神戸六甲の私のマンションを見、長浜に住む私の娘の子（ひ孫）に会い、思い残すことが無くなったかのごとく、風邪で急性肺炎となり、入院5日後に急逝した。

父について感心することは、自分の寿命は永遠と考えていたのだろうかということである。亡くなる直前に最新のパソコンを購入。大学時代に愛読したドイツ語とフランス語の本を訳し、それをパソコンに保存。ブルーレイを2台購入し、種々の番組を録画するのが日課であった。私の家内や姉妹とは「録音した番組、いつ見るのだろう」といていた。写真のように、デジカメで庭の草花の変化を記録し、祖父宛の魯迅など中国人の書簡をスキャナで取り込んで整理。まさに現役と変わらない行動で、最後までぼけることなどなかった。正月の三段重ねのおせちを、一度に全種類食べなければ気が済まないというように、食欲も旺盛であった。ただ、自己規制も強く、好きな酒も、赤ワイン1日一杯と決めていた。私には絶対まねのできないことである。



最近、父が整理した祖父の書簡が中国で出版されたとの連絡があった。それを見ることもなく旅だった。今、父が世話していた草花が芽吹いてきているが、それを見ると、もう少し生きられたのではと思う今日この頃である。父に習った南部高校の卒業生の皆様に、この場を借りて、よき人生であったことを報告できるのは、息子としてこの上ない幸せと思い、筆を取らせていただきました。本当にありがとうございました。

「信濃からの便り」

昭和 28 年卒

林 忠雄（長野県須坂市 在住）

昨年6月、永年住み慣れた横浜市から長野県須坂市に転居致しました。転居に際して平成14年度の名簿に記載されている長野県在住の南高学友会会員を調べてみると僅か3名のみで、学友会会員に須坂市に転居しましたと連絡しても須坂市が長野県のどの辺にある町か理解して貰えないのではないかと思います。機関紙を借りて長野県を紹介したくペンをとりました。

長野県は日本列島のほぼ中央に位置し、南北に約212km、東西に約120km、面積は東京都・埼玉県・神奈川県・千葉県合計面積に匹敵する1万3562km²に及び、北海道・岩手県・福島県に次いで日本で4番目に広い県である（因みに和歌山県の面積は約3分の1の4726km²で30位）。また栃木・群馬・埼玉・山梨・岐阜・滋賀・

奈良と共に海に面していない8県の一つで、新潟・富山・岐阜・愛知・静岡・山梨・埼玉・群馬の8県に接していて県境の長さは835kmにも達している。

富山・岐阜との県境には飛騨山脈（北アルプス）、山梨・静岡との県境には赤石山脈（南アルプス）、新潟・群馬との県境には上信越火山帯、山梨との県境には八ヶ岳があり、2千m・3千mを超す高山が連なる山並みによって囲まれた中央部の北方には筑摩山地・南方には木曽山脈（中央アルプス）や伊那山地があるなど広い面積の大半を山地が占めている。人が住む集落はそれぞれの山並みの間に形成された盆地と盆地の周囲に開かれた比較的なだらかな山地に形成されている。

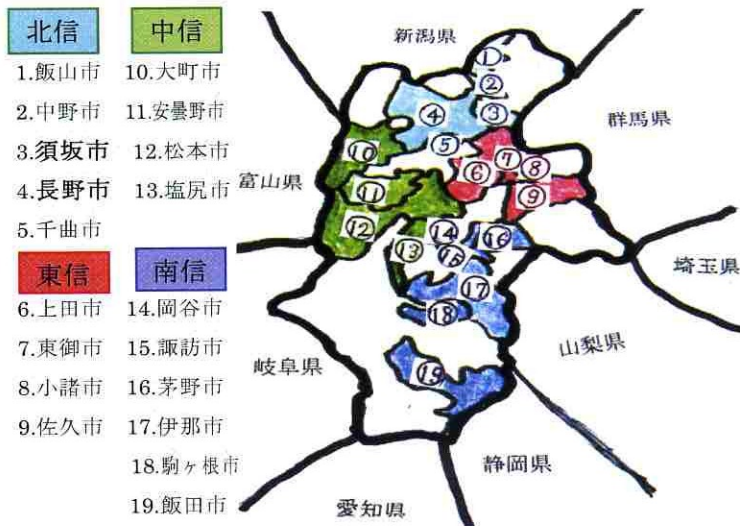
山並みで仕切られた多くの集落が南北に長い土地に点在し北部では日本海側の影響を強く受け南部では太平洋側の影響を強く受ける長野県は気象条件が複雑で、地方毎に大きく異なる標高差が気象条件を複雑にする要因になっている。また、山並を縫うように造成された道路や鉄道などの交通事情も複雑で、有名な行事が開催されても誰もが自由に参加できる訳ではない。そこで信濃の国（長野県の古い呼び方）に住む人びとは県内を北信・東信・中信・南信に4分割して物事を論じる。

北信地域は長野盆地を中心に千曲川に沿って開けた地域で県の東北部に位置し、長野市・千曲市・須坂市・中野市・飯山市などが含まれ県の面積の19%を占める。また、東信地域は北信地域の南側に位置し活火山の浅間山を筆頭に標高2千m級の火山群に囲まれた地域で、上田市・小諸市・佐久市・東御市・軽井沢町などを含み県の面積の18.2%を占める。

中信地域は最も広い松本盆地を中心に北アルプスに沿って開けた地域で県の西北部に位置し、松本市・塩尻市・安曇野市・大町市などが含まれ県の面積の33.4%を占めている。また、南信地域も広い諏訪盆地や伊那盆地を中心に開けた地域で県の南西部に位置し、岡谷市・飯田市・諏訪市・伊那市・駒ヶ根市・茅野市などが含まれ県の面積の29.4%を占めている。

私の住むことになった須坂市は千曲川を挟んで長野市と対峙し共に北信地域の南端近くに位置する。冬季日本海から押し寄せる雪雲は有数の豪雪地帯といわれる北端の飯山市や栄村に大量の雪を降らせるが、長野市と須坂市は長野県の中でも比較的標高が低い位置にあり、私が以前住んでいた頃（約30年前）の須坂市は水道管が氷結したり、冷蔵庫に入れ忘れたビールや牛乳が凍結しビンが割れることもあったが、地球の温暖化が進んだ今日ではそういうことも少なくなったようである。

ところで東日本と西日本の境界が日本列島のどの辺にあるかご存じですか？日本列島が乗っているプレートの下に太平洋プレートやフィリピン海プレートが沈み込み地震や津波を起こすことは良く知られているが、日本列島が北米プレートとユーラシアプレートの二つのプレート上に形成されプレートの境界線が本州の中央部を横断していることはあまり知られていない。北海道を含む東日本が形成された北米プレートと沖縄を含む西日本が形成されたユーラシアプレートの境界線に沿って糸魚川―静岡構造線といわれる大断層があり、糸魚川―静岡構造線は本州の中央部を横断するように新潟県糸魚川市から姫川に沿って南下し、長野県の大町・松本・諏訪を経て山梨県西部から静岡市に至る。東日本と西日本の境界については諸説あるが地形や地質が構造線の両側で大きく異なる長野県の中央部こそが東日本と西日本の境界ではないだろうか。



梅をつむ黄
福つみ
「黄金漬」を細くうな道南産の真昆布で
つんだ身で黄沢な梅干です。

元祖はちみつ梅
こせなづけ
黄全漬
選りすぐりの紀州南高梅とはちみつが
醸したす、まろやかで上品な梅干です。

通信販売カタログ・商品のお問合せ、お求めは

フリーダイヤル 0120-197-832 FAX フリーダイヤル 0120-319-515

受付時間 平日/午前8時～午後8時 土曜/午前8時～午後5時 FAXおよびホームページでは24時間、受け付けております。

株式会社井グチ 〒645-0027 和歌山県白旗町みなべ町西本庄1224 <http://www.umel.com/> 井口食品工業株式会社

先ずはじめに、昨年 3 月東日本大震災で被害を受けられた多くの方々に、心よりお見舞い申し上げます。さらに亡くなられた方々に対して哀悼の意を捧げたい。

さて、私自身古希を過ぎて改めて来し方をふり返ってみると、若い頃は月日の経つのはそれ程早いものとは思わなかったが、近年は「光陰矢のごとし」と言う格言がまさしく実感となってきた。

南高東京支部が結成されたことを知ったのも昨日のように思われたが、早や 9 年目を迎えようとしている。そして、学友会誌も当初のものと比べてみると内容も充実しカラー写真も多く取り入れ、すばらしい編集となっている。

そこで、今回は平成 23 年 1 月に発行された「支部だより・南高 8 号」を読み、感想を述べてみたい。最初に目にとまったのは、私より 1 年先輩の浜田好通さんが執筆されている「58 年ぶりの修学旅行」の記事であった。

当時を彷彿させるような事が興味深く書かれていたので、早速、私も高校時代のアルバムを繙いてみた。旅行の日程・コース等は全く同じであり、鎌倉の大仏の前では全員の写真が映っている。思えば、日光の華厳の滝を見て感嘆し、陽明門の煌びやかさに魅せられたことも忘れられない。また、その頃は戦後で食糧事情が悪かったので、旅館で食べる“お米”を全員が袋に入れて持って行った記憶がある。



私はこの修学旅行で最も期待していたのは何と言っても、自分の目で実際の「富士山」を見たいと言うことであった。しかし、残念なことにその願いは叶わなかった。その理由は、当時の東海道線は未だ新幹線もなく、大阪から東京までは 12 時間をかけて走る夜行列車であったからである。それ故に富士山を見ることが出来る静岡近郊を通過する時間帯は、行きは夜明け前で、帰りは夜の帳に包まれた頃であったので、車窓より見る外の景色は漆黒の闇の世界であった。

ところで、私は「富士山」を見たいと思うようになったのは中学時代に遡る。入学して初めて受けた国語の授業であった。新しい教科書の最初のページには実にきれいな富士山の写真が

載っており、次ページには『万葉集』の解説に加えて 10 首の万葉名歌が挙げられていた。その中で特に印象に残ったのは自然歌人・山部赤人の

田子の浦ゆ うち出でてみれば真白にぞ 富士の高嶺に雪は降りける

(巻 3 - 318)

と言う歌であった。

この歌は大和の山河を見馴れた赤人が、東海道を東国へ旅し、途中眼前に高く雪を頂く富士山を望み感嘆したものであるが、この歌のすばらしさに私はすっかり魅せられ、それ以来富士山に対する憧れが常に頭の片隅に残って離れなかった。「富士山」は日本を代表する名山であることは少年時代から知っていた。しかし、それは絵画や写真等で見ただけで生の富士山はどんなものであるかは知らなかった。従って将来は必ず自分の目で確かめようと思っていたのである。そして、その思いが実現したのは、今から 50 年前の昭和 36 年の春 4 月であった。

幸いなことに私の勤務した大学は富士山の麓の「三島」にあり、それ以来今日までこの地に住み続けることとなったのである。

三島は民謡の「農兵節」の一節に “富士の白雪は溶けて流れて三島にそそぐ・・・” と歌われているように市内のあちこちに富士山からの伏流水が湧き水となって流れている。それ故に人々は三島を「水と緑の都」とも言っている。

現在、私は長年の夢がかなって、このすばらしい霊峰の麓で四季を通して移り変わる姿を眺めながらの生活の出来る喜びを味わっている。

ところで、近年は夏になると富士登山をする人が急増し、去年は約 40 万人であったと言われている。本会報にも杉野雅子さん(昭和 42 年卒)が昨年の 7 月末に南高の同窓生と共に初めて富士登山を体験され、大変感激されたと述べられている。

日本神話によれば、富士山は「木花之佐久夜毘売」(コノハナノサクヤヒメ) という女性の神と言われている。そして、この女神は誰もが認めるように大変容姿端麗で、凛として他の山々を寄せつけないところがある。それ故に、たゞゆきずりの人が絵ハガキで見るとようなあの美しい姿の全容を何時でもみられるとは限らない。いや、むしろ見られない場合の方が多いと言えるかも知れない。

長年、富士山麓に住む私の所に和歌山の親戚や友人から、最も美しい富士山をみる事が出来る時期はいつか、と言う問い合わせが時々ある。

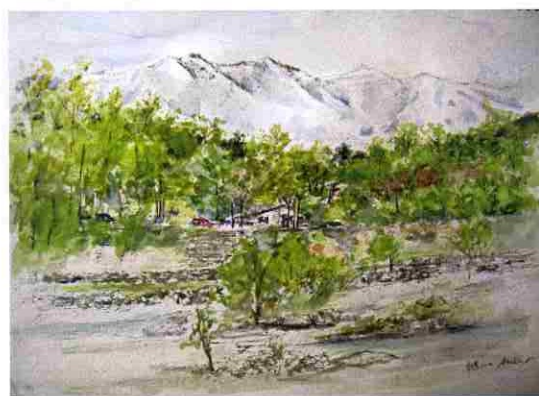
それに対して私は、あくまでも個人的な見解であるとして、次のように答えている。季節は晩秋から初冬にか

けて雲一つない空気の澄んだ早朝で、しかも一夜でもって頂上付近が、薄化粧したように白く輝いている景色は実にすばらしく、山麓に住む人々にしか味わえない風物詩の一つと言えるのではなかろうか・・・と。

末筆となったが、近年、富士山を世界遺産として登録しようという運動が起きている。この実現のためには解決すべきいくつかの問題もない訳ではないが、一日も早く実現することを願って止まない。



ミニギャラリー



上の水彩画は石田明子(旧姓 浜田)さん、下の色鉛筆画は小西早苗(旧姓 濱田)さんの作品です。
お二人とも絵が好きで、ずっと描き続けておられます。



竹中司郎さん 第14回「日本自費出版文化賞」受賞

「この時代！もう一つの自分探し 四国八十八ヶ所」

定年後 42 日間かけて四国霊場八十八ヶ所を歩いて巡り、宿で夜ごと記した克明なメモをまとめた 390 ページの著書が、日本自費出版文化賞（主催：日本グラフィックサービス工業会 後援：朝日新聞社 他）を受賞しました。竹中さんおめでとうございます。

竹中さん(昭 33 年卒)はこの体験を通して、行く道々 50 人近い方々から受けた温かい

“お接待”に何よりも感動されていました。また、「歩き続けると、私のからだところについているしがらみのようなものが洗われ、素裸の自分が出てくるのであった。現代はあまりにも複雑化、スピード化し、効率化を求めてしまう。生物として直接的に自然環境と向き合って生きることの復活がもう少し必要だと思う。」と述べられています。

(2011. 9. 17 朝日新聞に掲載)

*この本をお読みになりたい方は、学友会事務局 齋藤までご連絡ください。



四国八十八ヶ所 (グーグルより)



四国遍路の装備



23 番薬王寺に向かう 4 人



事務局から



今回、下記の方々が入会してくださいました。嬉しいです！

賛助会員新規入会

堅田 伸次 成田 千枝子 (旧姓 中松) 楠本 邦一

高柴 岩雄 堅田 十三生 鈴木 一郎 川口 光雄

*敬称略



編集後記



今年は例年になく寒さ厳しく、二月下旬、梅の花はまだ硬い蕾。この会報が皆様のお手元に届く頃には春の気配があちらこちらに感じられることでしょう。

さて、今年度も皆様方からお寄せいただいた原稿をもとに支部会報第 9 号を発行することができました。今回はかなり遠くにお住まいの方も原稿を送ってくださいました。とても有難いことです。この会報が、より多くの皆様方に読んでいただけることをスタッフ一同、心より願っております。

なお、編集は、稲井・木村・齋藤が担当しました。今後とも皆様からの投稿や情報をお待ちしております。写真も添えていただければ幸いです。



事務局スタッフ



宮下 典子(旧姓 西林)	Tel・Fax	03-3986-3253	稲井 清子(旧姓 真造)	Tel・Fax	0467-58-3492
岩本 喜直	Tel0	049-251-1454	灘井 新一	Tel・Fax	0474-79-5358
	Fax	049-252-4370			
山崎 春樹	Tel・Fax	0463-58-4295	齋藤 文子(旧姓 阪本)	Tel・Fax	045-383-8703